慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	太平天国の長沙攻撃をめぐる考察
Sub Title	An analysis of the Taiping army's attack on Chang Sha in 1852
Author	菊池, 秀明(Kikuchi, Hideaki)
Publisher	三田史学会
Publication year	2012
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.81, No.1/2 (2012. 3) ,p.117- 150
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20120300-0117

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

太平天国の長沙攻撃をめぐる考察

菊池秀明

はじめに

近年の中国史研究における大きな変化は、新史料の発見によって歴史の具体像が明らかになった点であろう。とりわけ清朝政府の公文書である檔案史料の公開は、時代の要請に基づいた一面的な歴史認識の見直しを可能にした。太平天国運動（一八五〇年～六四年）についても今こそ「革命の先駆者」あるいは「破壊者」といった従来の評価を超えて、客観的な立場からその実像を解明する必要が高まっている。

かつて筆者は太平天国の生まれた原因が広西移民社会のリーダーシップを握った科挙エリートと非エリートの対立にあり、[1]清朝の統治が行きづまる中で人々は「理想なき時代」を乗りこえる処方箋を熱望していたと述べた。[2]また筆者は上帝会が慎重に準備を進め、各地の会員を糾合して金田団営を成功させたこと、[3]永安州時代の太平天国は楊秀清のイニシアティブを強化しながら王朝体制のひな形を整え、広東信宜県の凌十八はその慎重な行動ゆえに太平軍と合流できなかったことを指摘した。[4]

さらに筆者は広西北部、湖南南部を転戦した太平天国が強い宗教性を帯びており、全州の守備隊を全滅させた不寛容な攻撃を目の当たりにした人々は「王を殺された報復のために住民を虐殺した」というフィクションを生み出したことを明らかにした。[5]また蓑衣渡の戦いで打撃をうけた太平軍は道州で体制を立て直し、各地の反体制勢力に蜂起を促すなど積極的な動員工作を行うことで多様な階層の参加者を得て勢力を拡大したこと、清朝側は地方長官が戦闘を回避するなど失態が相次ぎ、官吏の不

正が明るみに出たために人々の失望と憤激を招いたが、それらは太平天国にとって追い風となったことを指摘した。[6]

本稿は一八五二年九月から一一月にかけて行われた太平天国の長沙攻撃について考察する。それは太平軍が永安州を出発して以後、南京に到達するまでの間に経験した最も長い戦役であり、彼らと清軍の戦略的な特徴や問題点を考えるうえで格好の題材を提供している。この戦役については簡又文氏[7]、鍾文典氏[8]の通史的著作に加え、王慶成氏[9]、崔之清氏[10]が詳細な分析を行っており、それらの研究成果をベースに分析を進めたい。

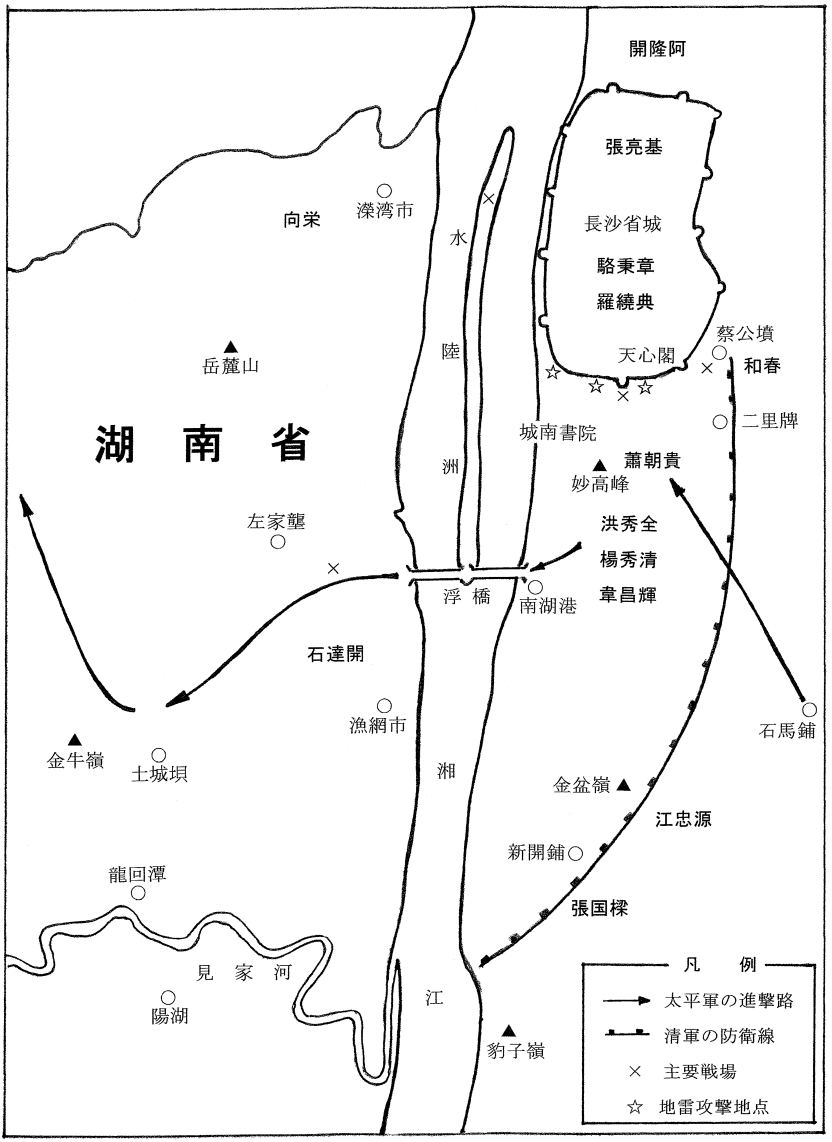
筆者は一九九九年から台北の国立故宮博物院を訪問し、同図書文献館所蔵の檔案史料を系統的に整理、分析した。また二〇〇四年に湖南長沙と曾国藩の故郷である双峰県（旧湘郷県）を訪問すると共に、二〇〇八年、二〇〇九年にはイギリスの国立公文書館でいくつかの新史料を発見した。[11] さらに中国第一歴史檔案館編『軍機処奏摺録副・農民運動類』および同館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』[12]を併せ用いることで、この時期の太平天国の歴史を出来る限り具体的に描き出してみたい。それは太平天国史を階級闘争史の枠組みから解き放ち、新たな全体史を構築するための一階梯になると思われる。

一、太平軍の長沙急襲と蕭朝貴の戦死

（a）先鋒隊の派遣と清朝側の防衛体制

別稿で述べたように、八月一七日に湖南南東部の要衝である郴州を占領した太平天国は、八月二一日に西王蕭朝貴の率いる先鋒隊が陸路長沙へ向けて出発した。[13] 彼らはまず八月二三日に永興県を占領し、三一日には衡州府の安仁県を、九月三日には長沙府の攸県を陥落させた。[14] また七日に醴陵県を攻め落とした彼らは西北へ進路を変え、一一日には長沙郊外の石馬鋪で西安鎮総兵福誠率いる陝西兵二〇〇〇名を壊滅させた。そして同日中に先鋒隊は長沙城南の妙高峰付近に布陣して城内への攻撃を開始した。[15]

長沙の攻略は太平天国が湖南へ入った当初からの目標であった。[16] この計画は蓑衣渡の敗北によって頓挫したが、道州から郴州へ進出したことで再び現実味を帯びた。この頃清軍に捕らえられた太平軍の密偵も「逆首は衡州から長沙へ向かおうとしている」[17]と供述している。王慶成氏はもしこの時に太平軍が長沙を占領したならば、湖南各地の反政府勢力の蜂起を促し、四川、湖北あるいは河



太平軍長沙攻撃地図

図1—1　長沙攻防戦地図
郭毅生主編『太平天国歴史地図集』中国地図出版社、1989年、55頁

南へ進出する足がかりをつかむことが出来ただろうと述べて、その戦略が妥当であったと評価している。

いっぽうで王慶成氏は蕭朝貴がわずかな兵を率いて進発した後、洪秀全と楊秀清が郴州に留まり、全軍がすぐに後を追って北上しなかったのは誤りであったと述べている。彼らが郴州に長く滞在する必然性はなく、かえって長沙攻略のチャンスを逃したというのである。[18] 本節ではこうした見解が的を射たものであるかどうかを検証して行きたい。

まずは先鋒隊の規模について考えよう。『賊情彙纂』によると、はじめ蕭朝貴が率いた兵力は三〇〇〇名弱であったという。郴州を占領すると彼は「聞くところでは長沙の城壁は低く守りもおろそかであり、もし軽装の兵数千でこれを急襲すれば、簡単に手に入れることが出来る」と献策した。そこで洪秀全は彼に二〇〇〇名の「老賊」を与え、郴州で参加した反乱軍数百名を道案内役として、長沙へ向けて進発させたと述べている。[19]

檔案史料によれば、八月二三日に永興県を攻めた太平軍は「逆匪が千余人で、土匪千余人を合わせて永興へ分竄した」[20]とある。また長沙攻撃が始まって間もない九月一六日に清軍が「陣地から観察したところ、長髪の賊匪は約六、七百人で、土匪が約三千余人であった」[21]と記されている。さらに別な報告にも「現在［長沙へ］到達した賊匪、土匪はすでに一万人」[22]とある。これらの数字は互いに開きがあり、その理由として途中で軍に加わった人数が多かったことや清朝側の誇大報告が挙げられる。だが『粤匪犯湖南紀略』も「偽西王は数千の賊をもって衝出して紛擾した」[23]と述べており、郴州出発時に三〇〇〇名前後という記載は比較的実数に近いと考えられる。

次に蕭朝貴軍の兵力は当時の太平軍においてどの程度の割合を占めていたのだろうか。『賊情彙纂』は道州駐屯時の総兵力が五万人であったと述べ、[24] 李秀成も「郴州で二、三万の衆を招き、茶陵州でも数千を得た」[25]と語っている。この数字は明らかに誇大であり、別稿で指摘したように湖南進出時の太平軍は一万人程度、道州で数千名が参加した過ぎなかった。[26] また候補知県江忠源は郴州に残った洪秀全らの本隊について「賊の後隊は一万余人」[27]と指摘しており、道州出発後の参加者を含めても二万人を大きく超えることはなかったと推測される。

加えて太平軍では兵の逃亡を防ぐために新たな参加者を厳しく管理し、「事態が急を告げない限りはこれらの者を用いて戦いを助けさせることをしなかった」[28]とある

ように新兵を戦闘に参加させなかった。広西按察使姚瑩は道州の太平軍について「賊で戦える者は二、三千人」[29]と述べており、『賊情彙纂』も「能く戦える者は万人に満たず、その他は皆脅されて従った新賊だった」[30]と指摘している。当時の太平軍で戦闘能力があったのは数千人だったという前提に立てば、蕭朝貴が三〇〇〇名弱の兵力で郴州を出発したのはそれなりの必然性があったと言えよう。

いっぽう清軍の防備はどうであろうか。長沙の防衛に最初に取り組んだのは湖南巡撫駱秉章であった。六月に彼は「省城の兵が少ない」ことを指摘し、すでに到着していた四川兵一四〇〇名、江西兵一〇〇〇名に加えて湖南西部の鎮筸鎮などから兵一四〇〇名を動員した[31]。また長沙城は久しく修理がなされず、城壁の崩れた部分も多かった。駱秉章は二万両を投じて「日夜城に登って監督し急がせた」とあるように補修工事に取り組み、八月二九日にようやく完成したばかりだったという[32]。

次に長沙の防衛を任されたのは幫辦軍務を命じられた前湖北巡撫の羅繞典であった。八月一三日に長沙へ到着した彼は、新たに編制された壮勇、広東勇、瀏陽勇、湘勇など三二〇〇名の閲兵を行った[33]。また羅繞典は長沙東南二五キロにある跳馬澗などの要所に防衛拠点を設けようと図り、八月末に工事を始めたが完成しなかった[34]。加えて衡州から戻った湖南提督鮑起豹は城壁に近い建物を撤去するように主張したが、紳士たちの反対を受けた羅繞典はこれに同意せず、代わって城壁の周囲に土塁を築くことにした。だがそれも「工いまだ半ばにして賊至る[35]」とあるように太平軍の到着には間に合わなかった。このため先鋒隊の指揮官であった曾水源らは、「幸いにしてこの城はなお未だよく修理されておらず、全州と比べても恐れるに足りない[36]」と述べており、太平軍が長沙攻略は充分に可能との認識を持っていたことがわかる。

さらに省城を守る清軍の防禦体制は構造的な欠陥を抱えていた。王闓運『湘軍志』は次のように指摘している。

寇が至った日、城中の兵勇は八千余り、統べる将は数百おり、名目の上では巡撫（駱秉章）の指揮下にあったが、巡撫はあえて節度を言わなかった。諸生や挙人、貢生たちはそれぞれ百人、あるいは二十人を率いて城壁の警備に当たることを求めたが、その多くは羅繞典を訪ねてものを言った。布政使の恒福は北京に召還され、潘鐸が後任を命じられたが、着任していなかった。署司道の周顎、張其仁らがい

たものの、彼らと兵餉について大いに議論する者はいなかった。ただ善化県知県の王葆生が兵について語るのを好んだが、大官、将軍たちも彼に尋ねようとはしなかった。[37]

ここからは城内を守る清軍の指揮系統が統一されず、駱秉章と羅繞典の連携がうまくいかなかったことが窺われる。王定安『湘軍記』も「[羅] 繞典と [駱] 秉章は防衛について議論したが、意見の食い違いが多く、流言を禁じて事態を鎮めることしか出来なかった」[38]とあるように、二人が協力体制を築けなかったと述べている。また知県王葆生や紳士黄冕（長沙県人）が積極的な提言を行い、一、二千斤の大砲四〇門を鋳造して城南五キロの金盤嶺などに配備したが、将校たちが彼らの意見を聞かなかったため有効に活用されなかった。わずかに効果を発揮したのは団練による内応者の摘発で、「首逆に従って長沙へ至り、軍情を探り、偽示を散布」[39]した密偵の王世恩らを捕らえたという。

こうした問題点はすぐに結果となって現れた。蕭朝貴の軍が長沙に接近すると、住民の中には急を知らせる者がいたが、太平軍が耒陽県、衡州を経由して北上すると予想していた長沙の文武各官は、公文書を伴わないこの情報に怒って通報者を殺そうとした。また石馬鋪の赤岡嶺に配備された陝西兵二〇〇〇名は戦闘経験がなく、米の食事に不慣れなために城内から麺を買っていた。このため太平軍の攻撃を受けた一一日朝、彼らは「いまだ朝食を食べておらず、相持すること一時余りで皆潰え散じた」[40]という。

さらに金盤嶺に駐屯していた副将朱瀚率いる沅州兵一四〇〇名は密偵の捜査を口実にした暴行が絶えず、「郷民たちはこれに苦しんだ」[41]とあるように住民たちの反発を買った。太平軍の攻撃が始まると総兵福誠は朱瀚に救援を求めたが、朱瀚は「旗を伏せ、塁を閉じてただ賊に気づかれることを恐れた。陝兵は援軍がなく、このため大敗した」とあるように陣地内で息を潜めて陝西兵を見殺しにした。また彼らは湘江を渡って三汊磯に撤退し、翌日には城内に逃げ込んだ。この他に城外に駐屯していた瀏陽勇五〇〇名も「逃散」[42]し、長沙城外の清軍は総崩れとなって城南の数キロにおよぶ範囲が太平軍に占領された。

この日の戦闘について、曾水源らは「連続して敵の陣地を破ること七、八里、大小の妖官数十余名を殺し、妖兵の死者は二千余りに及んだ。屍は積み重なること山の

如くで、手に入れた兵糧や大小の砲は多く、火薬も四千斤以上、ラバや馬も数え切れない[43]」と報告している。また敗残兵が城内へ逃げ込むと、たまたま巡回していた巡撫駱秉章は急ぎ南門を閉めさせたが、どの軍が敗北したのか情況を把握出来なかった。さらに城内では急ぎ大砲を城壁の上に据えて反撃すべきだという意見が出たが、砲架がない場所に大砲を据えれば城壁が崩れ、敵の侵入を招くという反対があり実行されなかった。やむなく湖南提督鮑起豹が代わりに城の南楼に据えたのは城隍廟の神像であったという[44]。

このように考えると、太平軍が清軍の準備不足をついて長沙を攻略する可能性は少なからずあったと見るべきだろう。ところがこの日太平軍に攻城戦を行うつもりはなく、地理も不案内だったため、城の東南隅にある高楼を城楼と勘違いし、ここに攻め寄せたが門はなかった。そこで兵を戻したがすでに南門は閉じられており、突入の機会を逸してしまった。さらに彼らは城外の住宅を占拠したが、どこを攻めれば良いかわからず、やみくもに城内へ向けて砲を打ち込むに止まった[45]。太平軍は城外の清軍を一掃したものの、情報の欠如によって千載一遇のチャンスを活かすことが出来なかったのである。

（b）蕭朝貴の死と先鋒隊の戦い

緒戦の勝利によって長沙攻略の自信を深めた太平軍は、九月一二日に再び城南に攻勢をかけた。だがこの時に不幸な事態が発生した。先鋒隊の将帥であった西王蕭朝貴の負傷である。曾水源らの報告は次のように述べている。

二十九日（九月一二日）に私たちは行って進攻しようと思い、西王にご報告申しあげたうえ、牌刀手を率いて各門へ向かって攻撃をかけました。図らずも妖兵が砲を放ったところ、西王の胸のあたりに命中して身体を貫きました。傷は大変に重く、口も目も動きません。私たちはこの悪い知らせに大変憤りました。幸いに天父の顧みがあり、［死んで復活した］天兄の物語にならうことができるかはわかりません。

この省（長沙）は大変に広く、目下聖兵たちがほしいままに攻めておりますが、いまだ守備にあたる人がおりません。そこで九千歳（東王楊秀清をさす）にお願い申し上げます。どなたか上将をいくらかの聖兵を率いて遣わされ、兵たちにはそれぞれ乾飯三斤を携行させて、来たりて共に城を攻め取ることが出来れば、すなわち万全の聖策と存じます。わ

が主天王がおいでになるかどうかは、御意に従うべきことなので、私たちからは敢えて申し上げることはいたしません……。ただ西王が災難に遭われ、私共の守りに頼るべきものがないため、各王千歳にとくに申し上げる次第です。[45]

ここでは一二日の戦闘で蕭朝貴が重傷を負い、援軍が必要であることが述べられている。なお蕭朝貴が負傷した時の情況について、徐広縉らは捕虜の供述から「南城の外で旗を手に指揮[46]」しているところを撃たれたと報じた。洪仁玕も「西王は敵楼の上で目立つ衣装を着、城内を伺っていたため、突然流れ弾に当たって傷つき昇天した[47]」とあるように、人目を引く格好をしていたためにねらい撃ちに遭ったと示唆している。だが崔之清氏が指摘するように、曾水源らの報告は蕭朝貴が陣頭指揮を取っていたとは述べていない。またこの日の戦闘を報じた羅繞典らの上奏（咸豊二年八月初三日）も、蕭朝貴らしき「目立つ衣装」の人物については言及していない。[48]

むしろ羅繞典らによると、この日太平軍は妙高峰から城内へ向けて発砲し、城上の清軍もこれに応戦した。また太平軍は「土を運び石を担ぎ、蟻か蜂のように群がって［妙高峰へ］登り、砲台を建設」しようとした。そこで妙高峰に相対する南城魁星楼に大砲を設置した鮑起豹が砲撃を命じると、「傷斃すること数十人、閧然として四散した」とある。蕭朝貴が負傷したのもこの妙高峰の砲台構築を監督していた時のことと推測される。[49]

重傷を負った蕭朝貴であったが、その死の正確な日付は不明である。曾水源らの報告が出されたのが九月二二日のことで、少なくとも一〇日間は生死をさまよっていたと思われる。彼の死後、遺体は長沙郊外の老龍潭に埋葬された。太平軍の退出後に清朝側が墓を暴いたところ、「顔はいまだ腐っておらず、識別が可能であった。胸には弾丸で出来た傷があり、黄色い緞子の馬褂をまとっていて、血痕もなお新しかった」という。

蕭朝貴の戦死は、南王馮雲山の死に続く太平天国の重大な損失であった。清朝にとっても前軍主将として「戦いにあっては先陣をつとめ、匪党は均しくその指揮を聞いた[50]」蕭朝貴の存在は脅威であり、蓑衣渡の戦いで蕭朝貴死亡の誤報が伝えられたのも無理からぬことであった。[51]また天兄キリストの下凡を通じて会衆を統率していた彼の死が、紫荊山以来の盟友であった楊秀清にとって「その死を隠す[52]」ほどの痛手であったこと、それは洪秀全と楊秀清の間をつなぐパイプを失わせ、永安州時代から顕

著となりつつあった楊秀清の独裁に拍車をかけることになった点は否定できない。

さて蕭朝貴の負傷後、先鋒隊はいかなる戦いを展開したのであろうか。九月一三日から数日間、彼らは「連日妙高峰、雩壇坪に土を盛り石を重ね、砲台を築いて昼夜砲撃した。また火箭、火弾を放つなど、勢いは激しかった」[53]とあるように、妙高峰の砲台から城内へ向けて砲撃を加えた。またその一部は「南門外の金雞橋、瀏陽門外の校場に集まり、時に小鳥門などにも出没して、人数はたいへん多く、昼夜環攻して、余力を残さなかった」「碧湘街、鼓楼門、西湖橋、金谿橋一帯の民家は均しく賊に占拠され、党羽は甚だ多かった」[54]とあるように、城南の広い範囲で城壁近くの民家に立てこもり、城上の清兵に発砲しながら城内突入の機会を窺った。

一六日に曾水源らは「死を冒して城を攻める」一方で、数十名の将兵を南門の下に潜ませ、錐で城門に穴を空けさせた。これに気づいた清軍は彼らを攻撃しようとしたが間に合わなかった。この時羅繞典は霹靂桶（火桶）を彼らに向かって投げ込み、「数十人が立ちどころに斃れ、一人として逃れた者はなかった」[55]とあるように計画は失敗した。すると曾水源らは城外で毒煙を焚き、城上の兵勇がひるむ隙に城壁を登ろうとした。だが北風が吹き、煙が太平軍陣地へ流れたために作戦は成功しなかった。[56]

続く一七日に太平軍は郴州で組織された土営（工兵部隊）に「金鶏橋の水道に穴を掘らせ、城壁を傾け壊そう」と試みた。だが羅繞典らは「あらかじめ火桶をすえつけておいたため、数人を爆死」[57]させた。また太平軍は南門でも「地道を掘り、火薬を装着」したが、再び清軍に発見されてトンネルは破壊された。すると一八日に曾水源らは大砲で城内へ激しい砲撃を加え、南門の城垣が数メートルほど崩落した。太平軍は「いよいよ多く来たりて、次第に近くに迫った」とあるように城内への突入を試みたが、たまたま賽尚阿らが救援に派遣した雲南楚雄協副将鄧紹良の率いる鎮筸兵九〇〇名が長沙へ到着し、城の内外から反撃して太平軍を城外の民家まで押し戻した。[58]

この間、城内の清軍は「ほとんど計の出ずるところなし」と防戦に追われたが、その中で目立った働きを見せたのは新任の布政使である潘鐸だった。太平軍の攻撃が始まる直前の九月一〇日に長沙へ到着した彼は、「街市を歩いて商人たちに普段通り店を開くように諭し、紳士たちに接見して防衛について相談した。また兵勇たちに

衣服や食糧を存分に与え、高い褒美を出したため、にわかに兵民の意気は上がり、喜んで戦うようになった」とあるように、城内の人々の動揺を抑えつつ士気の鼓舞につとめた。また長沙の紳士である陳本欽（道光年間進士）、黄冕、湘陰県の李星漁、善化県の唐際盛（生員）らが潘鐸の呼びかけに応え、食糧や壮丁を出して警備に努めたという。[59]

さらに戦局の変化に大きな影響があったのは、各地からの援軍が続々と長沙へ到着したことだった。まず九月一九日に鳳凰廳同知賈亨晋の率いる土兵（苗族兵）一〇〇〇名が姿を見せ、鄧紹良の指揮のもと二〇日の戦闘に参加した。[60] また永綏協副将瞿騰龍は「精鋭の苗兵」数十名を率いて長沙城へ入り、[61] 二三日に鄧紹良と共に南門外の太平軍陣地に攻勢をかけた。続いて二四日に河北鎮総兵王家琳が河南兵一〇〇〇名を率いて入城し、翌二五日に出撃して太平軍兵士が立てこもっていた民家を焼き払った。[62] さらに二六日には広西から太平軍を追撃してきた綏靖鎮総兵和春、鎮遠鎮総兵秦定三の率いる湖南、貴州兵二〇〇〇名が到着し、衡州から派遣された都統銜頭等侍衛開隆阿の広東兵七〇〇名、候補知県江忠源の率いる楚勇一五〇〇名と共に長沙城の東側、北側などに布陣した。[63]

このように九月下旬に長沙へ到着した清朝側の援軍は七～八〇〇〇名にのぼり、城内の守備隊と合わせてその兵力は一万五〇〇〇名に及んだ。江忠源が「城内をあまねく歩いたところ、防禦は全てが理にかなっているとは言えないが、賊の人数がなお少ないため、攻撃もそれほど緊急ではなかった」[64] と述べたように、太平軍が早期に長沙を陥落させる可能性は失われた。むしろ清軍の反攻によって形勢は逆転し始めた。

この時に羅繞典らが立てた作戦は、砲台を壊すことにより太平軍の攻撃力を奪い、民家を焼いて彼らの拠点を失わせた後に殲滅するというものだった。まず九月一九日から鄧紹良が湖南兵、四川兵、鳳凰土兵を率いて妙高峰などの太平軍砲台を攻撃した。[65] 二三日からは瞿騰龍も加わって南門外の民家と歩哨の詰め所を焼き払おうと試みた。[66]

さらに二八日からは和春、江忠源の軍が中心となって、城の東南隅にある天心閣一帯で太平軍と戦った。とくに焦点となったのは天心閣の南側に位置する蔡公墳の争奪戦で、二九日に清軍は「蔡公墳に営塁を築いて攻撃すること数時間、楚兵、楚勇が賊牆を奪い、民家二軒を焼い

た。ついで逆匪は妙高峰寺の右側から百余人が現れて様子を窺ったが、貴州兵勇が迎撃して賊数人を斃すと、撤退して陣地から出てこなくなった[67]」とあるように、この地から太平軍を排除して彼らの勢力範囲が城の東側へ伸びるのを防ごうとした。同じことは城の西側である湘江沿岸でも進められ、太平軍が船を集めて渡河を図っていると知った羅繞典は、鳳凰土兵を「河西に移駐」させて防備を固めたという。

これら一連の戦いによって、曾水源らは兵力不足から戦線を南門外の狭い範囲に縮小せざるを得なくなった。また「賊はついに再び出てこなくなり、ただ周囲に高く牆塁を築いた。わが兵が進攻すると、賊は牆眼から鎗炮を施したため、得手することが出来なかった[68]」とあるように、太平軍は守勢に回って戦況は膠着状態に入った。さらに一〇月二日に広西提督向栄が長沙へ到着した。戦闘を避けたとの理由で一度は新疆送りを命じられていた向栄は、咸豊帝の信頼を回復するべく翌三日に早速太平軍陣地へ攻勢をかけたが、互いに死者を出しただけで決着はつかなかった[69]。やむなく彼も「一歩一歩陣地を築き、まずは地勢を謀る[70]」戦略に同意し、呉三桂時代に使用した大砲を城南に設置して妙高峰を砲撃したという[71]。

（c）郴州の戦いと洪秀全らの北進

さて長沙城外で先鋒隊と清軍のあいだで戦闘が行われていた間、郴州の太平軍本隊はどうしていたのであろうか。初め太平軍を追撃してきた和春は郴州郊外の塘昌埠に陣をしき、河北鎮総兵常禄や副将瞿騰龍、鄧紹良らに「賊前に廻」って永興県に駐屯させ、和春と「腹背夾攻」させる予定でいた[72]。だが八月二九日に「郴州の賊の仲間で続いて永興へ至る者が数千人」とあるように、先鋒隊が占領していた永興県城に太平軍の後続部隊が入り、やむなく常禄は平山冲に陣を構えて城内の太平軍とにらみ合った。

二九日から九月二日にかけて、和春は郴州の太平軍に攻撃をかけた。だが太平軍は「わずかに賊営の牆内から発砲して反撃した」「敗北して巣に戻ると、再び隠れて出てこなかった」「攻撃すること長時間にわたったが、賊は隠れたまま出てこないので、わが軍に命じてゆっくり引き上げさせた」とあるように、太平軍は守りを固めて誘いに乗らなかった。和春も太平軍の北進を防ぐため、郴州西南の獅子嶺から東北の陳家楼へ陣地を移した[73]。

太平軍の長沙攻撃が始まると、咸豊帝は賽尚阿にくり返し救援軍を派遣するように命じた。九月一一日には賽

尚阿からの報告が半月以上も届かないことを理由に「頂戴を摘去」[74]し、翌日には彼が「遷延して散渙」な各軍を統率出来ていないと叱責して、みずから長沙へ向かうように命令した[75]。だが賽尚阿は鄧紹良、瞿騰龍、王家琳などの兵四〇〇〇名を長沙へ派遣したものの、「広東仁化県の匪徒がすでに楽昌県城を犯しているが、実に宜章、郴州と近いため、あえて彼らにすぐに全て動くように命じることは出来ない。賊の後衛部隊が隙をついて不意打ちをかけてくれば、さらに戦局は収拾がつかなくなる」[76]と述べて、一万五〇〇〇人いた郴州一帯の清軍を全て長沙へ向かわせることには消極的だった。

なぜ賽尚阿は長沙救援に多くの兵を送らなかったのだろうか？これは洪秀全らの主力がなぜすぐに北上せず、郴州、永興県に留まったのかという問いと密接に関係している。

第一に考えられるのは、それまでの戦いで苦杯をなめた賽尚阿が太平軍との決戦を避け、羅繞典、駱秉章など籠城していた漢人官僚の功績が大きくなる長沙の防衛に協力することを望まなかった可能性である。じじつ彼の行動はそのように受けとめられ、一〇月一四日には「身は統帥でありながら調度が適切でなかった。およそ号令に厳しさを欠き、賞罰が適当でなかったために、軍を疲れさせ兵糧を浪費させた」[77]と非難されて革職拏問の処分を受けた。そしてこの前提に立てば、王慶成氏が言うように太平軍の本隊が郴州で一ヶ月近くも逗留する必要はなかった。清軍の多くは「動員した兵が揃わない、あるいは敵に臨んで雨にたたられた」[78]などの口実を作っては模様眺めをしていたからである。

その後北京に送られて取調べを受けた賽尚阿は「自らの無能を認め、殺人をするに忍びず、大股の賊匪を迅速に殲滅出来なかった罪は実に逃れがたい」[79]と供述した。だが一方で彼は「賊が分かれて省城へ向かった時、賽尚阿はすでに提督鮑起豹を長沙へ急行させて守備に当たらせており、また兵を分けて援軍を送った。さらに向栄に桂林から湖南省城へ行き、賊を撃って自ら罪を贖わせるように求めた」[80]と述べており、二人の提督とくに向栄を派遣すれば長沙の防衛は可能と考えていたことがわかる。また当時賽尚阿は病気に苦しんでいたといい[81]、少なくとも湖広総督程矞采が「初めに賊警を聞くや、にわかに長沙へ戻り……、次いで衡州を守るだけで、一つの計略も進展させなかった」[82]という失態ゆえに解任されたのとは同列に論じられないように思われる。

第二に考えられるのは、太平軍の本隊が清軍を牽制する意図を持って郴州一帯に止まり、敵の兵力を分散させることで先鋒隊の長沙攻撃を支援した可能性である。この説を唱えたのは崔之清氏で、元々先鋒隊の任務は奇襲にあり、長沙の防備が固められてしまえば成功の見込みは低かった。むしろ全軍が速やかに北進すれば、追撃の清軍と長沙近郊で対峙することになり、桂林の場合と同じく内外からの攻撃を受けて苦戦を強いられたに違いない。さらに女性や子供、老人を含んだ一万人を清軍の攻撃を防ぎつつ三〇〇キロも移動させ、長沙到着後も安全な場所に駐屯させるのは至難の業であっただろう。少なくとも洪秀全らがすぐに北上せず、郴州に留まったのは必ずしも失策とは言えないというのである。(83)

その後の郴州一帯の戦いを見る限り、崔之清氏の説はそれなりの説得力を持っている。郴州城内の紳士から「逆首洪秀泉は城内の州衙に住み、楊秀清は科挙試験場にいて、それぞれ衛兵数百が護衛している」との情報を得た和春は、陳家楼から朱木山へ軍を進めた。すると九月九日に太平軍三〇〇〇名が出撃し、城北の陣地を強化しながら清軍の攻撃をしりぞけた。このため九月一七日に和春は郴州における指揮を天津鎮総兵李瑞に引き継いで長沙へ出発したが、彼と秦定三、江忠源が率いた兵力は三五〇〇名に過ぎず、八〇〇〇名が郴州戦線に残された。同じことは永興県についても当てはまり、三～四〇〇〇名の太平軍守備隊は新たに戦線へ到着した張国樑らの潮捷勇四〇〇〇名を釘付けにしたという。(84)

だが「逆もまた真なり」で、筆者は清軍の布陣が太平軍の作戦に与えた影響も小さくなかったと考える。ここで言う「清軍」とは長沙や郴州のそれではなく、両者の中間に位置する衡州に駐屯していた程矞采の率いる兵四〇〇〇名であった。元々清朝は衡州を「賊をしてあえて北竄させない」ための「水陸の要隘」(85)と位置づけ、太平軍が道州にいた五月にも二〇〇〇名の兵を置いていた。(86)その後賽尚阿が永州から衡州へ移動すると、衡州は湖南における清軍の総司令部となり、長沙の救援が命じられた時も「いまだ敢えて軽々しく動かさない」(87)とあるように、初めのうち衡州からは援軍を送らなかった。

いっぽう郴州の太平軍にとって見れば、多くの輜重や家族をかかえた本隊の移動は水路を使うことが望ましかった。じじつ平南県大旺墟から永安州へ進撃した時には、洪秀全の本隊は大同江、濛江を経て永安州へ向かった。(88)郴州も耒水を下れば衡州で湘江と合流し、長沙へ進出す

ることが可能となる。加えて郴州付近の「河面は船隻が甚だ多」く、程矞采がその多くを撤去させたものの、船の入手はある程度可能であっただろう。[89]

ところが衡州の賽尚阿は咸豊帝の再三の催促にもかかわらず、決して長沙へ向かおうとしなかった。[90] やむなく洪秀全は九月二三日に陸路郴州を出発し、李瑞、常禄、張国樑の追撃を振り切りつつ一〇月一三日に全軍が長沙へ到達した。だが賽尚阿は「私たちはただ静鎮し、厳しく準備をして、諸軍を催促して進剿」[91]させると主張し、彼が長沙へ到着したのは欽差大臣を解任された後の一〇月二一日のことだった。これに対して咸豊帝は「賽尚阿と程矞采は現在衡州にいるが、攸県、安仁などの地からは目と鼻の先である。どうして賊匪が逃げていくのを坐視するのか」「賊匪が全て衡州を過ぎて北進し、勢いが燎原の如くになったら、誰がその咎を負うのか?」[92]と厳しく叱責している。

つまり賽尚阿と程矞采は咸豊帝の命令を無視し、かなりの兵力を擁したまま衡州に留まることで太平軍本隊の水路による北進を阻んだ。それは彼らが意図して手に入れた戦果ではなかったかも知れない。だが長沙を急襲した蕭朝貴軍の第二の目的が衡州に駐屯する清軍を引きつけることにあったとすれば、賽尚阿らの「無能」ぶりは郴州で出発のチャンスを窺っていた太平天国首脳の予想を上回るものであったと言えよう。

二、長沙における攻防戦と太平軍の撤退

(a) 長沙城外における攻防戦と太平軍の地雷攻撃

郴州を出発した太平軍の本隊は一〇月五日にまず三〜四〇〇〇名が長沙へ到着し、一〇月一一日には洪秀全、楊秀清も城南の先鋒隊陣地へ入った。これに勇気づけられた曾水源らは五日、七日の二度にわたり蔡公墳一帯の清軍陣地に攻勢をかけた。だが長沙の清軍は「探報によれば賊は郴州より大夥を竄出させ、すでに醴陵から省に来たった」[93]とあるように、太平軍本隊の接近について情報をつかんでいた。このため総兵和春の湖南兵は蔡公墳に布陣して守りを固め、その南側の白沙井、仰天湖に進出した総兵秦定三の貴州兵、江忠源の楚勇と共に妙高峰の太平軍を迎え撃った。また六日に広西提督向栄は南門の天心閣に砲台を築き、五千斤の大型砲をここに運んで太平軍陣地に砲撃を加えた。さらに太平軍は「忽然と賊千余人を分けて東路からわが軍の後方を襲った」とあるように後方から挟み撃ちにしようとしたが、秦定三らが

反撃したために太平軍は退却した。[94]

また一〇月七日には新任湖南巡撫の張亮基が兵二〇〇〇名を連れて長沙に到着し、羅繞典らに代わって清軍の指揮にあたることになった。[95] 張亮基は経世学派の知識人で兵法にも通じた挙人の左宗棠（湖南湘陰県人）を幕僚に迎えており、ここに長沙攻防戦は新たな局面を迎えることになった。

さて張亮基は長沙到着後まもない一〇月一八日に清軍が採るべき戦略について上奏した。それによると太平軍は城南に布陣しているが、まず注意を払うべきは湘江を通じて南北に進出する可能性であり、船の通行を禁止して中洲である水陸洲の西に障害物を沈めるなどの措置を講じた。次に警戒すべきは東あるいは南へ進出する危険であり、これまでは兵力不足のため瞿騰龍、鄧紹良、江忠源らを醴陵陂、蔡公墳、小呉門、校場一帯に駐屯させていたに過ぎなかった。だが張亮基は向栄や湖南提督鮑起豹、前任巡撫駱秉章と「再四商議」のうえ、省城から五キロほど離れた金盆嶺、黄土嶺、阿彌嶺、広済橋に新たに兵を派遣し、城外の清軍と「互いに犄角」させることにした。

続いて城の北側については、駐屯していた総兵王家琳の河南兵一〇〇〇名に増援を送った。また湘江の対岸である江瀠湾、魚湾市には守備兵がおらず、「賊が必要な油や塩、米穀などは往往にしてここで取っている」とあるように太平軍が交易を行っていた。そこで貴州安義鎮総兵の常存を貴州兵、土兵一四〇〇名と共に派遣し、「賊の接済を断つ」と共に太平軍が西進する道を阻もうとした。さらに省城内の食糧、軍需物資については「なお充分に余裕がある」としたうえで、みずから常徳で準備した火薬二万斤、弾丸二万斤を長沙へ運んだため「轟撃に資するに足る」と報じている。

この張亮基の戦略からは城の防衛に汲々としていた九月中旬までの清軍の姿を窺うことはできない。むしろ太平軍の周囲にゆるやかな包囲網を形成することで、他地区への進出を防ごうと考えていたことがわかる。さらに張亮基は次のように述べている。

賊匪は広西で蜂起し、湖南で蔓延したが、至ったところはみな高い山々であった。いま省城を攻撃してようやく平地に入り、身を隠すことのできる山中の洞窟もなければ、伏兵を置くだけの辺鄙な小道もなくなった。山越えという彼らの得意技は使えなくなり、狼や虎が穴ぐらを失い、魚やエビが水を失っ

たのと同じである……。

賊匪の大隊が侵攻してきたが、本当の長髪賊は数千人に過ぎず、残りはみな短髪の賊でやはり数千人、合計しても一万人余りに過ぎない。彼らは百戦錬磨で、異常なまでに凶悪かつ狡猾であるが、仲間を率いてことごとく投げた網にかかった。賊はわが軍を囲もうとしていたが、かえってわが軍に包囲されたのであり、もし四方から方法を講じて討伐すれば、おのずから一撃で殲滅することができる……。

賊は省城を攻撃して以来、しばしば戦っては毎日のように死傷者を出しており、その心はすでに怯えている。わが兵は勇気百倍であり、乗ずべき好機である。[96]

ここで彼が太平軍の兵力を一万人余りとしたのは、本隊の人数を含めなかったためと考えられるが、その戦略的特徴が山地を利用した神出鬼没の行動力にあり、平野での戦闘には慣れていないと分析した。そして城の攻撃によって太平軍が戦力を消耗し、清軍が包囲網を形成した今こそ殲滅のチャンスであると述べている。

はたして一〇月一四日に太平軍六～七〇〇〇名が城の東側にある瀏陽門外の校場に攻撃をかけると、江忠源、秦定三、侍衛開隆阿らの軍との間に激しい戦闘が発生した。はじめ太平軍は優勢であったが、和春が救援に駆けつけて挟み撃ちにすると、「賊匪は省城を囲んで以来、いまだこれほど大きな傷を受けたことはなかった」[97]とあるように損害を出して敗退した。続く一〇月二〇日には戦線に到着した総兵常禄の兵が城南の金盆嶺に陣地を構築しようと図り、これを阻もうとした太平軍と交戦した。[98]太平軍は伏兵を置いて清軍を誘ったが成功せず、逆に井湾、洞井鋪に進出していた清軍に夾撃されて数百名の死者を出した。その結果清軍の「軍威は大いに振るった」[99]という。

二度の敗北を前に太平軍は湘江の西岸に進出して食糧獲得のルートを確保し、新たな戦場を切り開くことで攻城部隊にかかる重圧を軽減しようと試みた。すでに彼らは「米と塩が欠乏し、時折小舟で人気のない場所から河港の郷村へ密かに渡り、新米を奪おうと図っている。また榔梨市に至って船や品物を略奪しようとしている」[100]とあるように西岸の各郷に姿を見せていた。一〇月一七日に翼王石達開の軍二～三〇〇〇名は南湖港、朱張渡から渡河し、勒江河、市鋪屋を占領して浮き橋を作った。翌一八日には象鼻垻、龍廻潭に進出して洋湖一帯の晩稲を

刈り取り、一九日には岳麓、金牛嶺および瀏湾市を襲った。[101]これを知った賽尚阿は知府朱啓仁の率いる潮州勇三〇〇〇名を平塘へ向かわせ、二〇日に太平軍との間に戦闘が始まった。また向栄も総兵馬龍率いる四川兵を西岸へ派遣した。[102]

いっぽう城南の攻城部隊は地下のトンネルと地雷による城壁の爆破を試みた。「楊秀清は賊党を遣わし、昼夜力を注いで地道を掘ることすでに数カ所にのぼる」「掘った地道は……、わが軍によって数カ所を破壊されたものの、手分けをして掘り進めている。木の板や杉の枝の間に草を詰め、地道の中に支柱を作って、多くの道を掘り揃えて城の足下が穴だらけになったところで、火を放って木の板などを焼き、城壁を崩壊させようというのである」[103]とあるように、城壁の下にトンネルを掘って地盤を弱めさせ、城壁を崩落させる作戦を取った。この工事を担当した土営は郴州、桂陽州の炭坑、鉱山で働いていた「礦夫」で、「険悪な場所を掘り進めることに慣れ、地底深くでも恐れなかった」[104]とある。

これに対して清軍は城外に深い溝を掘り、トンネルを探し当てては破壊した。「城西の魁星閣から、東は天心閣から南門外へ掘った横溝は、急いでさらに深く広く掘らせ、将校たちに兵を率いて城内に通じた賊の地道を警戒させた。また土や木、石などを準備しておき、捕虜の賊を城上に登らせ、賊が新たに掘った地道の場所を聞き出してはすぐに穴を掘った」[105]とあるように、城外の南側に深い溝を東西に掘ってトンネルを露出させると共に、捕虜の供述から新しいトンネルをつきとめては使用不能にした。このため太平軍は数十日で十数ヶ所のトンネルを掘ったが、その多くは火薬で撃退されるか落盤、浸水のために失敗し、わずかに三ヶ所が城壁に到達したに過ぎなかったという。[106]

ちなみに太平軍によるトンネル攻撃の様子は、国立公文書館に残された長沙攻防戦図【図1―2】にも明確に示されている。それによると妙高嶺に「土城」を築いた太平軍は、城南へ向かって二本の「地龍を開き掘って城を攻」めた。これに対抗する清軍は、妙高嶺の真向かいに「和大人営（和春の陣地）」が置かれ、白馬廟から東南へ向かって湖南、貴州、湖北、河南、江西の各兵勇が築いた「兵勇壕坑」が伸びていた。また金盆嶺付近には江忠源が布陣し、さらに南側には「張家祥」すなわち永興県から太平軍本隊を追って長沙へ到達した張国樑の軍も姿を見せている。[107]

図1—2　長沙攻防戦図（F. O. 931 1906）

地雷を用いた最初の攻撃は一〇月三〇日に行われたとする説もあるが[108]、詳細な記録が残っているのは一一月一〇日の戦いからである。この日太平軍は魁星楼一帯の城壁を爆破して城内への突入を試みた。張亮基らの上奏は次のように報じている。

二十九日（一一月一〇日）に各軍が兵を陣地に引き上げさせて間もなく、賊は南城の西隅でひそかに地雷を放った。賊の陣地に近い城壁はレンガが飛び散り、城は四丈余りにわたって崩落した。すると賊の陣地では法螺貝が鳴り響き、該匪が約二、三千人勢いに乗って叫び声をあげ、蜂擁として前進してきた。

私たちは先にあらかじめ副将鄧紹良に鎮筸兵八百名を率いて入城させ、遊撃部隊として策応に役立てていた。このとき鄧紹良は大声で叫んで城壁の崩れた場所から躍り出ると、手ずから数人の賊を斬った。彼は右臂を撃ち抜かれて負傷したが、なお立ちはだかって退かなかった……。賊目は手に大きな黄旗を持って人々を率いて真っ直ぐに登り、千総の趙継宗が頭に傷を受けて戦死した。だが将兵たちは勇気をふるって前へ進み、立ちどころに賊目を斬り、「太平先鋒」と記された大黄旗を捕獲した。さらに勢いに乗って攻めくだり、一斉に槍炮を放って長髪の賊匪を百数十名、短髪の賊匪を約三百余名も斃した。残りの賊は慌てて敗走した[109]。

また光緒『善化県志』によれば、この日城壁が爆破されて太平軍が殺到すると「城内の居民はことごとく北城に向かい、縄で城壁を越えて外へ逃げようとした。女たちは井戸へ身を投げたり、首をくくったりと、その勢いは沸き立つが如きであった。その時各地の兵勇もみな戦闘服を脱ぎ、北城へ向かって奔走した」とあるように、城内ではパニックが発生した。だが救援に駆けつけた和春が負傷した鄧紹良に代わって太平軍の進攻をしりぞけた。また張亮基、布政使潘鐸も自ら指揮して「木板、土嚢を取って城外を塞ぎ、たちまち壁が出来上がった。内側は街石を積み上げて堅固にしたため、人心はやや定まった」とあるように応急措置を施して混乱を収拾した。県志は鄧紹良の奮戦がなければ「省城数十万の生命は危ういところだった[110]」と讃えている。

一一月一三日に太平軍は南城外で再び地雷を爆発させた。この時は城壁の強度を増すために外側へ張り出した部分を破壊したに過ぎなかったが、太平軍は「南城はす

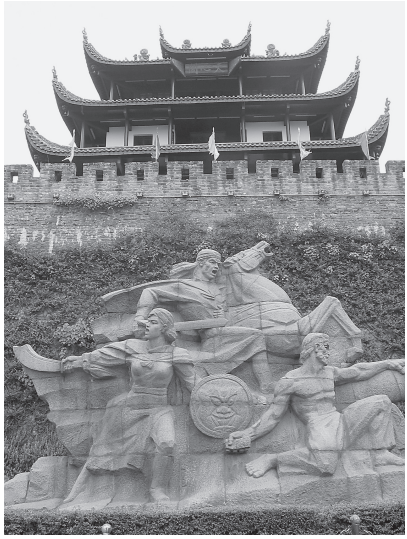


図 1—3　長沙天心閣

図 1—4　長沙の城壁

でに地雷によって破られた」と思いこみ、二〜三〇〇〇人が突入を試みた。だが発生した火事の炎が風にあおられ、多くの太平軍将兵が煙に苦しんだところを和春の兵に狙撃された。また江忠源も救援に駆けつけ、太平軍は「偽先鋒の曾自南」を初めとする三〇〇名余りが戦死した。[111]

その後太平軍は一一月二九日にも城南の魁星楼一帯を爆破し、丞相秦日綱の率いる決死隊が数十本の「長梯（長ハシゴ）」用いて城壁をよじ登ろうと試みた。だが瞿騰龍の率いる兵勇がこれを迎え撃ち、太平軍は三〇〇名余りの死傷者を出して敗退した。

結局太平軍の地雷攻撃は失敗に終わり、「仲間の精鋭は半ばがすでに死傷した」[112]とあるように多くの犠牲者を出した。その原因について『賊情彙纂』は「長沙を与しやすいと考え、これを軽んじて攻撃を試したために、死者の数は他に比べて多かった」[113]とあるように、太平軍首脳部が清軍の力を侮ったことに求めている。実際のところ湖南南部の諸城が陥落したのは清軍が守備を放棄した結果であり、頑強な抵抗を屈服させるだけの実力は当時の太平軍になかった。ましてや長沙の城壁は桂林と比べても堅固であった。

李秀成は「天王と東王は長沙に陣をうつし、数十日力戦したが成功しなかった。いくつかトンネルを掘って長沙の城壁を爆破したが、わが将兵は進むことができず、清の向栄、張国樑の大軍に外側をとり囲まれていた……。それからも城壁を壊したが、相変わらず敵は降参しなかった。わが軍には食糧はあっても油や塩がなく、将兵の士気は盛んだったが力が出なかった。このため長沙城の攻撃は成功しなかったのである」[114]と述べている。省城の占領をめざしたものの城を包囲出来ず、かえって清軍の包囲を受けつつトンネル攻撃を続けた太平軍にとって、その代価は高かったというべきであろう。

（b）湘江西岸における戦いと太平軍の長沙撤退

さて一〇月二一日に長沙へ到着した賽尚阿は、湘江西岸へ進出した太平軍について「河東から渡った賊が新たに陣地を数ヶ所作り、調べたところ見家河から嶽麓のふもとに至るまで、賊営の置かれた範囲は十数里の長きに及んだ」と報告している。これは【図1—2】からも窺うことができ、川岸に近い沙洲に「賊営」すなわち太平軍の陣地が点在していることが確認される。

太平軍の西岸進出に危機感を持った向栄は、みずから

渡河して岳麓山のふもとに陣をしき、一〇月二四日から鄧紹良の湖南兵、馬龍の四川兵、常存の貴州兵および潮州勇を率いて太平軍と戦った。彼が軍前で「もし一歩でも後退する者がいれば斬る」と申し渡して将兵を叱咤すると、清軍の突撃を受けた太平軍は魚網洲を占領できずに後退した。[115] 翌二五日に向栄は北側から攻勢をかけ、太平軍の陣地となっていた村々を焼き払った。南側に布陣した潮州勇と委員張宏邦率いる「砲船」も見家河の太平軍を攻め、「（見家河）北岸の田中にある賊営一ヶ所を焼き燬したため、賊はすでに全員が大河に面した三つの賊営へ逃れた」とあるように、太平軍の陣地を焼いてその占領地が拡大するのを防いだ。

続く一〇月二七日にも向栄は長沙城南の和春と連携を取り、それぞれ太平軍陣地に攻撃をかけた。石達開は陣地の周囲に尖った竹片を張り巡らせ、清軍将兵に砲撃を加えたため、「わが兵の槍炮は撃ち進むことができず、鏖戦すること久しきにわたったが、攻め入ることができなかった」とあるように、清軍は見家河の太平軍陣地を陥落させることが出来なかった。そこで向栄は二八日に四川兵、広西兵の支援のもと、敵陣近くに「営塁」を築かせて包囲網を形成しようとした。また三〇日には北側にある漁網市、唐家洲、黒石頭の太平軍陣地を攻撃したが、やはり攻め破ることは出来なかった。[116]

この数日間の結果をみる限り、戦況は清軍の優位で動いているように見えた。だが清軍は内部に多くの問題点を抱えていた。張亮基は次のように述べている。

訓練の方法が久しく講じられず、将兵が戦う時もただ槍炮に頼るばかりで、少しでもうまく行かないと、すぐに逃げ出してしまい、それぞれ互いに顧みようとしない。兵士たちの間では軍令が行き届かず、好き勝手をするために、戦いに勝てないばかりか、守りを固めることも出来ない。

私は赴任以来、『戦守要略』を印刷して各陣地に配り、彼らにおおよその規律を教えた。それは「城の防衛が切迫している時に持ち場を離れた者は斬る」「命令なく城を乗り越えた者は斬る」といった普通の軍令であった。だが昨夜城を巡回してみると、沅州営の兵二名が大胆にも城外から壁をよじ登って入ろうとしたため、私はすぐこの二名を殺してさらし首とし、人々への戒めにした。だが中には私がやり過ぎたという者もおり、ここから腐敗がすでに進んでおり、整頓は容易でないことがわかる。[117]

ここからは清軍の規律が相変わらず悪く、命令が守られないために勝利を収められなかった様子が窺われる。また太平軍が城壁を爆破した時、多くの兵士が戦闘服を脱いで逃亡を図ったが、日頃から訓練に姿を見せなかった副将清徳はみずから頂戴を取り、民家に隠れて笑いものとなった。[118] 張亮基はこうした「退縮の将領」を処罰しなければ、将兵が「法を畏れず、賊を畏れる」ようになると指摘したうえで、指揮官同士の連携がないために「急場に間に合わず、事機を逸した例は十の六、七に及ぶ」[119]と嘆いている。

さらに長沙の住民に深刻な被害をもたらしたのは兵勇の略奪と暴行だった。とくに張国樑の率いる潮州勇、捷勇、仁勇は「豚や牛を殺し、民家を壊したため、郷民は逃げて無人となった」「郷間で略奪と姦淫を働き……、米穀や銀銭、食物は上下二十里にわたって洗うがごとくなくなった」とあるように、その無軌道ぶりは群を抜いていた。これは太平軍が「安民を仮言し、一人たりとも婦女を犯さなかった」[120]のと比べて対照的で、「はじめ賊が醴陵を過ぎた時は、店はなお元の通りだった。潮勇が至るや、略奪によって全てが失われた。ゆえに当時は『兵は賊に如かず』という言葉がはやった」[121]と言われた。

一〇月三〇日夜、石達開は湘江の中洲である水陸洲を勢力下に収めるために牛頭洲へ兵を送った。これを見た向栄は西岸の太平軍を殲滅するチャンスと考え、三一日に兵三〇〇〇名を率いて牛頭洲の北側に渡った。はじめ馬龍の四川兵が南側の太平軍を攻撃すると、はじめ太平軍は「抵抗することが出来ず、林の中へ逃げ込んだ」[122]と敗走した。王家琳の河南兵が勢いに乗って追撃すると、林の脇から太平軍の伏兵が姿を見せ、「疾走すること旋風の如く」に後方へまわりこんで清軍を分断した。さらに後退していた太平軍も向きを変えて突撃すると、清軍は「驚き潰え」[123]て参将蕭峰春など約一〇〇〇名の死者を出した。向栄らは「賊が多く兵が少なく、勢いはすでにかなわない」と見て急ぎ軍を西岸に引き上げさせたが、渡河の途中に「誤って深みにはまり」溺死した者も少なくなかったという。

長沙城上でこの戦いを見ていた賽尚阿と張亮基は、「洲上の賊は初めわが兵によって撃ち破られたが、まさに追撃していると、忽然と後方から多くの賊が現れた。わが兵は支えられなくなり、洲の後側から圧倒された。心は焦ること焚くが如くであった」[124]と報告している。その結果湘江西岸における戦闘の主導権は太平軍へ移り、

清軍は「みな賊を畏れて戦おうとしなかった」[125]とあるように戦意を喪失した。

牛頭洲の敗戦後、向栄は張亮基の要請を受けて太平軍が設けた浮橋の破壊を試みた。一一月七日に朱啓仁、張国樑の率いる潮州勇、捷勇、仁勇は浮橋を攻めたが、遠くから鉄砲を放つだけで、浮橋に近づこうとはしなかった。九日に向栄と張国樑は河西の太平軍陣地に夜襲をかけたが、四時間以上の攻撃にもかかわらず「賊は堅く伏せて出てこなかった」と効果はなかった。さらに一一日に向栄は四川兵、広西兵を率いて浮橋を攻撃したが、「河岸の賊は数多くやってきて、しかも浮橋の両側は鎖を鉤で固く結んでおり、急には壊せなかったため、撤退して陣地へ戻った」[125]とあるように、すでに浮橋は補強されていて破壊出来なかった。

一一月一二日に新たに欽差大臣となった署湖広総督徐広縉が衡州へ到着した[126]。張亮基らは彼が一刻も早く長沙へ来ることを望んだが、徐広縉はこれに応じようとはしなかった。代わりに派遣された新任広西提督福興、高廉道沈棣輝も「衡州から湘潭まで行軍するのに七日、湘潭から平塘まで行くのに五日」とあるように遅々として進まなかった。この間向栄も攻勢をかけず、西岸の太平軍に新たな行動を起こす余裕を与えてしまった。

三回目の地雷攻撃が行われた翌日の一一月三〇日夜、太平軍は長沙から撤退して西北の寧郷県へ向かった。すでに張亮基は西岸の龍回潭が寧郷県方面へつながる戦略上の要地であると考え、福興にここへ駐屯するように要請した。だが福興はこれを無視し、向栄も兵力不足を理由に龍回潭へ兵を送らなかった。また三〇日に劉姓なる太平軍の頭目が向栄の陣営を訪ね、太平軍が天心閣の真下にトンネルを掘っているというニセの情報を流した。向栄がすぐに張亮基へ警戒するように書簡を送ると、劉姓の男は姿をくらませたが、それが太平軍の計略であるとは誰も気づかなかった[127]。

太平軍の長沙撤退について、張亮基らの報告は「十九日（一一月三〇日）夜、該匪は追剿が緊急なため、風雨と暗闇に乗じて河東の賊が西岸に渡り、小路から山を越えて四散して逃げた[128]」とあるように簡略である。また光緒『善化県志』は「十九日にわが軍がまさに会剿しようとしていると、夜の三更（午後一一時から午前一時）になって忽然と城外でほら貝が鳴り響くのが聞こえ、大河の東西両岸が真っ赤に燃え上がるのが見えた。そこで城外の官兵が調べたところ、賊の大股はすでに全部が河西

の小路からひそかに逃れたとのことだった[129]」と述べており、清軍が全く裏をかかれたことを伝えている。事実を知った文武官僚たちは「みな驚きかつ恐れ、あえて祝いの言葉を述べる者はいなかった[130]」とあるようにショックを隠せなかったという。

太平軍退出の知らせを受けた徐広縉は「匪徒たちが今回逃げ出したのは、実に塩と米がほとんど尽きたためであり、大軍の包囲が厳しくなったのを見て勢いを失い、捨てばちになった[131]」と報じた。確かに李秀成が述べたように、太平軍は塩と油の不足に苦しんだ。だが太平軍の進路について「断じて北へ行くことはない[132]」と述べ、南進の危険を強調してきた徐広縉の予想は全く外れた。むろん北進を懸念する声がなかった訳ではないが、太平軍も一部の軍を南へ向かわせて陽動作戦を取ったため、一二月一日に向栄、和春は追撃の兵を湘潭県へ向かわせ、結果として太平軍を捕捉できなかった[133]。やむなく彼らは張国樑や朱啓仁の潮州勇、長沙近郊の団練が太平軍の後衛部隊を襲い、追撃の軍が「偽翼王の石大凱（石達開をさす）[134]」を殺害したという「戦果」を報じざるを得なかった。

こうして八一日間に及んだ太平天国の長沙攻撃は終わった。駱秉章はその年譜の中でみずから次のように述べている。

この夜四更に南城外で炎の明かりが見え、賊が北へ遁れたことを知った。以前から賊は省河に船を用いて浮橋を作り、行き来しては食糧を奪っていた。賊はこの浮橋から西へ渡ったのであるが、河西にはもともと一万人以上の官兵がおり、向軍門［栄］もいた。どうしてその北竄を防ぐことが出来なかったのか、理由はわからない。

両広総督の徐［広縉］は広西から兵を率いて湖南へ入ったが、あえて長沙へ来ようとせず、湘潭に留まったのはまことに笑い草である。賽中堂［尚阿］はすでに解任されて取り調べを命じられていたため、思うように指揮が出来なかった。

この戦役たるや、長沙で賊と戦った城内、外および東河、西河の兵勇は全部で六、七万人いた。城中には欽差大臣が一人、巡撫が三人、提督や総兵が十一、二名おり、城外にも総督が二人いたのに、賊を滅ぼすことができず、彼らを北竄させてしまった。これもまた悔やむべきである[135]。

ここからは清軍が太平軍をはるかに上回る兵力を擁し、

包囲網を形成しておきながら、総司令官である徐広縉、賽尚阿が臆病あるいは無能だったために指揮系統を確立できず、太平軍を殲滅できなかったことに憤慨している様子が窺われる。むろん蕭朝貴が長沙を急襲した当初、落城の危険もあったことを考えれば、羅繞典らが「昼夜厳しく防衛し、内外から挟撃して、しばしば賊鋒をくじき、城垣を保衛[136]」した功績は小さくなかったと考えられる。また和春や江忠源が蔡公墳を死守して太平軍の城東進出を許さず、張亮基と協力して「前後三回にわたる轟城[137]」攻撃をしりぞけたことも戦局を大きく左右した。

だが長沙攻防戦において一見目立たないが、実は重要だった清軍の戦果として、太平軍に呼応しようとする各地の反体制勢力の動きを抑え、軍勢の拡大を防いだという点が挙げられる。本隊が長沙へ到着した後の太平軍は「長髪の賊匪が男女老幼を合わせても四、五千人に過ぎず、その万余を超える衆は多く土匪である」(138) とあるように、二万人強から多く見積もっても三万人程度の兵力であった。しかも新兵の多くは行軍途中の「茶[陵]、醴[陵]、安[仁]、攸[県]および郴[州]、桂[陽州]の各地で脅されて従った者たち[139]」であり、長沙到達後に大量の参加者があった様子は窺われない。

張亮基の上奏によると、太平軍が省城を攻撃していた間、長沙府属だけでも瀏陽、醴陵、益陽、寧郷各県で「土匪」が「結党横行し、郷里を劫掠[140]」していた。とくに瀏陽県東郷の周国虞が率いた徴義堂には「粤奸」即ち太平軍の工作員が派遣され、「粤匪が長沙を陥落させるのを待って、まさに大挙を図らんとしていた[141]」とあるように呼応する姿勢を見せていた。だが長沙へ到着した張亮基は長沙付近の橋口で店舗を襲撃していた劉爲善らを捕らえるなど、これら反体制勢力の活動を抑え込んだ[142]。また太平軍内に湖南各地で参加した新兵が多いことを知ると、解散を勧める告示を出したり、「招降」と記した旗を掲げて彼らに投降を呼びかけた[143]。さらに太平軍の周囲に包囲網を形成することで、長沙近くの呼応勢力が合流するチャンスを失わせた。

これらは勝敗を大きく左右するような功績ではなかったが、少なくとも長沙において太平軍が急速に勢力を拡大することを防いだ。太平軍は消耗戦の様相を呈したこの戦いで、人的な損失を補うことなく長沙を後にしたのである。

小　結

太平天国の長沙攻撃は一八五二年九月に西王蕭朝貴の率いる先鋒隊が三〇〇〇余名の兵力で長沙を急襲したことに始まった。それは戦闘可能な兵力が一万人満たなかった当時の太平軍の戦力を考えれば決して少ない数とは言えないが、地理に疎かったために城内突入のチャンスを逸し、蕭朝貴が戦死して奇襲作戦は失敗した。また各地から救援の清軍部隊が集まると、形勢は逆転して先鋒隊は防戦に追われるようになった。

いっぽう郴州にいた洪秀全の本隊は、九月下旬になってようやく北上を開始した。それは清軍を牽制して兵力を分散させ、非戦闘員の安全を確保するための行動であったが、同時に郴州下流の衡州に駐屯する欽差大臣賽尚阿、総督程矞采の軍が長沙へ移動するのを待ち、水路で長沙へ向かうチャンスを窺っていたためでもあった。結局賽尚阿は咸豊帝の命令にもかかわらず衡州を動かず、解任のうえ処罰を命じられたが、結果的に太平軍本隊は危険な陸路で北上せざるを得なかった。それは彼らが意図しなかった戦果であった。

本隊の長沙到達後、太平軍は城南の清軍に攻勢をかけたが失敗し、張亮基が太平軍陣地の周囲に包囲網を形成するなど、戦況は清軍の方が優位に立っていた。そこで太平軍はトンネルを掘り進め、三度にわたり地雷攻撃を試みたが、城内へ突入することは出来なかった。また攻城部隊にかかる圧力を軽減するべく湘江西岸へ渡河した石達開の軍は、向栄の清軍としばしば戦闘を交えた。ここでも清軍は優勢であったが、水陸洲の戦いで太平軍の伏兵攻撃を受けて大敗すると、彼らは戦意を喪失した。また彼らを支援すべく送られた張国樑の潮州勇は略奪に明け暮れ、欽差大臣徐広縉と共に到着する筈の福興の援軍はいっこうに姿を見せなかった。

太平軍の長沙撤退は、これら清軍の厭戦気分を巧みに突いた行動であった。清軍は事前に太平軍の動きを察知出来なかったばかりか、その行き先についても判断を誤った。そして追撃を振り切った太平軍は岳州で新たな発展のきっかけをつかむことになる。

結局のところ太平軍の長沙攻撃は失敗に終わった。許祥光が「咸豊二年（一八五二）に粤賊が長沙を攻めて破れなかったのは、天がこれを留めて東南を恢復する基としたのである[144]」と述べたように、後に湖南で組織された湘軍が太平天国鎮圧において果たした役割を考えれば、

その影響は少なくなかった。だが奇襲作戦に失敗し、水路を用いた本隊の迅速な北上もかなわず、長沙到着後も包囲網に阻まれて新たな参加者を獲得できなかった情況を考えれば、劣勢な兵力にもかかわらず健闘したと見るべきだろう。また後に大常寺少卿の雷以諴（湖北咸寧県人）が「羅繞典、張亮基はただ長沙を固守することにこだわり、全体の戦局について計画をたてようとしなかった」[145]と告発したように、太平軍が多くの清軍を長沙へ引きつけた結果、その後の岳州および湖北への進出が容易になったという側面も見逃せない。いずれにせよ彼らが省都クラスの城郭を占領できる力を持つためには、なお多くの経験と軍の拡大が必要だったのである。

註

（1）菊池秀明『広西移民社会と太平天国』【本文編】【史料編】、風響社、一九九八年。

（2）菊池秀明『清代中国南部の社会変容と太平天国』汲古書院、二〇〇八年。

（3）菊池秀明「広西における上帝会の発展と金田団営」（国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』三五号、二〇〇九年）。同「金田団営後期の太平天国をめぐる諸問題」（高知海南史学会編『海南史学』四七号、二〇〇九年）。

（4）菊池秀明「永安州時代の太平天国をめぐる一考察」（国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』三六号、二〇一〇年）。同「広東凌十八蜂起とその影響について」（吉尾寛等編『民衆反乱と中華世界―新しい中国史像の構築に向けて』汲古書院、二〇一二年所収）。

（5）菊池秀明「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」（国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』三七号、二〇一一年）。

（6）菊池秀明「太平天国の湖南進撃と地域社会」（国際基督教大学アジア文化研究所編『アジア文化研究』三七号、二〇一一年）。

（7）簡又文『太平天国全史』上冊、香港猛進書屋、一九六二年。

（8）鍾文典『太平天国開国史』広西人民出版社、一九九二年。

（9）王慶成「壬子二年太平軍進攻長沙之役」『太平天国的歴史和思想』中華書局、一九八五年、一六四頁。

（10）崔之清主編『太平天国戦争全史』一、太平軍興、南京大学出版社、二〇〇二年。

（11）菊池秀明「イギリス国立公文書館所蔵の太平天国史料について」東北大学中国文史哲研究会編『集刊東洋学』一〇二号、二〇〇九年。

（12）中国第一歴史檔案館編『清政府鎮圧太平天国檔案史料』一～二六、光明日報出版社および中国社会科学文献出版社、一九九〇～二〇〇一年（以下『鎮圧』と略記）。

(13) 郭廷以『太平天国史事日誌』商務印書館、一九四六年（上海書店再版、一九八六年、上冊）一八六頁は蕭朝貴の出発を八月二六日としており、王慶成氏もこれに従っている。だが崔之清氏は光緒『郴州直隷州郷土志』巻上、兵事に「（太平軍）陥郴州、踞城三日、分偽西王蕭朝貴一股由永興犯長沙」とあることを理由に、先鋒隊が進発したのは郴州陥落から四日目の二一日であると主張した（崔之清主編『太平天国戦争全史』一、五〇九頁）。後述の如く永興県は八月二三日に陥落しており、蕭朝貴が二六日に出発したというのは事実に合わない。ここでは崔之清氏の説に従う。

(14) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四八七頁。また同治『安仁県志』巻一六、事紀、兵変によると、「土匪」李光徳が太平軍に呼応して蜂起したが失敗した（楊奕青等編『湖南地方志中的太平天国史料』岳麓書社、一九八三年、七〇七頁）。

(15) 羅繞典等奏、咸豊二年七月二十九日『鎮圧』三、四八一頁。

(16) 菊池秀明「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」。

(17) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四八七頁。

(18) 王慶成「壬子二年太平軍進攻長沙之役」。

(19) 張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、老賊および新賊（中国近代史資料叢刊『太平天国』三、神州国光社、一九五二年、二九一頁・二九四頁）。

(20) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四八七頁。

(21) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月十四日『鎮圧』三、五三六頁。

(22) 羅繞典奏、咸豊二年七月二十九日『鎮圧』三、四八一頁。

(23) 佚名『粤匪犯湖南紀略』（太平天国歴史博物館編『太平天国史料叢編簡輯』一、中華書局、一九六二年、六三頁）。また江忠源「答劉霞仙書」には「賊衆雖称万人、其実能打仗者不過二、三千人」とある（『江忠烈公遺集』巻一）。

(24) 張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、老賊（『太平天国』三、二九〇頁）。

(25) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、一九九五年、一二二頁。

(26) 菊池秀明「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」。

(27) 江忠源「答劉霞仙書」『江忠烈公遺集』巻一。

(28) 張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、老賊（『太平天国』三、二九〇頁）。

(29) 姚瑩「請速進兵議」『中復堂遺稿続編』巻一。

(30) 張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、新賊（『太平天国』三、二九四頁）。

(31) 駱秉章奏、咸豊二年四月二十二日『鎮圧』三、二一〇頁。

(32) 駱秉章自注『駱公年譜』。

(33) 羅繞典奏、咸豊二年七月初八日『鎮圧』三、四四二頁。
(34) 光緒『善化県志』巻一五、兵防、険要附。
(35) 佚名『粤匪犯湖南紀略』『太平天国史料叢編簡輯』一、六三頁。
(36) 曾水源等稟、太平天国壬子二年八月初九日、F.O. 九三一一三五〇号、国立公文書館蔵。また中国社会科学院近代史研究所近代史資料編輯室編『太平天国文献史料集』中国社会科学出版社、一九八二年、一〇頁。
(37) 王闓運『湘軍志』湖南防守篇第一、岳麓書社、一九八三年、三頁。
(38) 王定安『湘軍記』巻一、粤湘戦守篇、岳麓書社、一九八三年、七頁。
(39) 駱秉章奏、咸豊二年六月十八日『鎮圧』三、三九七頁。また王葆生については光緒『善化県志』巻一八、名宦、黄冕については同治『長沙県志』巻二四、人物二にそれぞれ伝がある。
(40) 王闓運『湘軍志』湖南防守篇第一。また光緒『善化県志』巻三三、兵難附にも「時省城設有偵探、不敢直報、確者転戮其揺衆」とあり、斥候たちが民心を動揺させた罪で処罰されるのを恐れて事実を報告しなかったとある。
(41) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(42) 佚名『粤匪犯湖南紀略』『太平天国史料叢編簡輯』一、六三頁。
(43) 曾水源等稟、太平天国壬子二年八月初九日、F・O・九三一一三五〇号。
(44) 王闓運『湘軍志』湖南防守篇第一。
(45) 曾水源等稟、太平天国壬子二年八月初九日、F・O・九三一一三五〇号。
(46) 徐広縉等奏、咸豊二年十二月二十二日『鎮圧』四、二七四頁。また同じ内容の上奏が張亮基『張大司馬奏稿』巻二に収録されている。
(47) 洪仁玕供、同治三年九月二十七日、中国近代史資料叢刊続編『太平天国』二、広西師範大学出版社、二〇〇四年、四一〇頁。
(48) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初三日『鎮圧』三、四九八頁。なお光緒『善化県志』は蕭朝貴の負傷について、太平軍の使用していた「銅砲が炸裂」したためと述べている（巻三三、祥異、兵難附）。また賽尚阿等奏、咸豊二年八月二十四日には「（九月二六日）偽西王所踞馬姓民房、時有張黄傘賊数十人在於屋後土山砌築営盤、経我兵砲撃十余人、並將馬姓楼房撃去屋頂」「探得賊信、係賊偽西王在省身受砲傷」とあり、蕭朝貴の負傷に気づいたのは九月下旬であった（『鎮圧』三、五六三頁）。
(49) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初三日『鎮圧』三、四九八頁。また同奏、咸豊二年九月初三日には「訊據生擒賊匪供称、偽西王於二十二日（一〇月五日）出探地勢、被我兵砲撃左肩、傷重未癒」とある（『鎮圧』三、五八七頁）。
(50) 徐広縉等奏、咸豊二年十二月二十二日『鎮圧』四、二七四頁。
(51) 「太平天国の広西北部、湖南南部における活動について」。
(52) 張徳堅『賊情彙纂』巻一、劇賊姓名上、首逆事実

（『太平天国』三、四七頁）。

(53) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。

(54) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初三日・八月十一日『鎮圧』三、四九八・五二五頁。また同奏、同年八月初六日には「該匪等連日用槍炮轟撃西南城角一帯」とある（同書五一〇頁）。

(55) 同治『安化県志』巻二三、人物、先達、羅繞典。

(56) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。

(57) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初六日『鎮圧』三、五一〇頁。

(58) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初九日『鎮圧』三、五一七頁。

(59) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。なお潘鐸については光緒『湖南通志』巻一〇八、名宦志一七、国朝六に記載がある。また陳本欽については同治『長沙県志』巻二四、人物二、唐際盛については光緒『湖南通志』巻一七六、人物志一七、長沙府、善化県にそれぞれ伝がある。

(60) 羅繞典等奏、咸豊二年八月初九日・八月十一日『鎮圧』三、五一七頁・五二五頁。

(61) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月十四日『鎮圧』三、五三七頁。

(62) 羅繞典等奏、咸豊二年八月二十日『鎮圧』三、五五五頁。

(63) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月二十四日『鎮圧』三、五六三頁。また江忠源「答劉霞仙書」『江忠烈公遺集』巻一にも「十三日（九月二六日）申刻抵省、軍於小呉門外、次早縋城而入」とある。

(64) 江忠源「答劉霞仙書」『江忠烈公遺集』巻一。

(65) 羅繞典等奏、咸豊二年八月十一日『鎮圧』三、五二五頁。賽尚阿等奏、咸豊二年八月十四日、同書五三七頁。

(66) 羅繞典等奏、咸豊二年八月二十日『鎮圧』三、五五五頁。

(67) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月二十四日『鎮圧』三、五六三頁。

(68) 江忠源「答劉霞仙書」『江忠烈公遺集』巻一。

(69) 羅繞典等奏、咸豊二年八月二十五日『鎮圧』三、五六九頁。なお同史料には「此次三次攻巣、斃賊四百余人」とあるが、江忠源は「斃賊数十、百人」と述べている（江忠源「答劉霞仙書」）。

(70) 羅繞典等奏、咸豊二年八月二十日『鎮圧』三、五五五頁。

(71) 佚名『粤匪犯湖南紀略』『太平天国史料叢編簡輯』一、六三頁。

(72) 程矞采奏、咸豊二年八月二十日『鎮圧』三、四五九頁。

(73) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四八七頁。

(74) 諭内閣、咸豊二年八月十一日『鎮圧』三、五二二頁。

(75) 軍機大臣、咸豊二年八月十二日『鎮圧』三、五二九頁。諭内閣、同年八月十二日、同書五三〇頁。

(76) 賽尚阿奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四九四頁。

(77) 諭内閣、咸豊二年九月初二日『鎮圧』三、五八六頁。

(78) 軍機大臣、咸豊二年九月初二日『鎮圧』三、五二九頁。
(79) 裕誠等奏、咸豊三年正月二十二日『鎮圧』四、五二八頁。
(80) 賽尚阿親供、咸豊三年正月二十二日、軍機処檔八八六五三号、国立故宮博物院蔵。
(81) 黎吉雲奏、咸豊三年七月二十五日『鎮圧』三、四七四頁。
(82) 諭内閣、咸豊二年九月初二日『鎮圧』三、五八六頁。また程矞采が太平軍の攻撃を避けて長沙へ退き、また衡州へ逃れたために人々の恨みを買ったと告発された点については菊池秀明「太平天国の湖南進撃と地域社会」を参照のこと。
(83) 崔之清主編『太平天国戦争全史』一、太平軍興、五三七頁。
(84) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月十四日『鎮圧』三、五三六頁。
(85) 軍機大臣、咸豊二年七月十九日『鎮圧』三、四六二頁。
(86) 程矞采奏、咸豊二年五月二十五日『鎮圧』三、三三八頁。
(87) 賽尚阿奏、咸豊二年八月初一日『鎮圧』三、四九四頁。
(88) 菊池秀明「金田団営後期の太平天国をめぐる諸問題」。
(89) 賽尚阿等奏、咸豊二年七月十四日『鎮圧』三、四四九頁。
(90) 諭内閣、咸豊二年八月二十三日『鎮圧』三、五六〇頁。なお清朝は賽尚阿に長沙へ急行して羅繞典らと「協同剿辦」し、程矞采には衡州で「督兵防守」するように命じていた（軍機大臣、咸豊二年八月二十三日『鎮圧』三、五六一頁）。
(91) 賽尚阿等奏、咸豊二年八月二十四日『鎮圧』三、五六三頁。
(92) 軍機大臣、咸豊二年八月二十九日・同二十六日『鎮圧』三、五七六・五七四頁。
(93) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月初一日『鎮圧』三、五七九頁。
(94) 羅繞典等奏、咸豊二年八月二十五日『鎮圧』三、五六九頁。
(95) 張亮基奏、咸豊二年八月二十六日『宮中檔咸豊朝奏摺』五、六二六頁。また張亮基『張大司馬奏稿』巻一。
(96) 張亮基奏、咸豊二年九月初六日、軍機処檔〇八六三四六号。また張亮基『張大司馬奏稿』巻一。
(97) 羅繞典等奏、咸豊二年九月初六日『鎮圧』三、五九六頁。
(98) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月十四日『鎮圧』四、一頁。佚名『粤匪犯湖南紀略』『太平天国史料叢編簡輯』一、六五頁。
(99) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。この金盆嶺・洞井鋪の戦いについては王慶成氏、崔之清氏共に瀏陽門外の戦いとは別の戦闘であるとしたうえで、太平軍の伏兵部隊が清軍の位置を充分に把握せずに布陣したことが敗北の原因であったと述べている（王慶成「壬子二年太平軍進攻長沙之役」および崔之清主編『太平天国戦争全史』一、太平軍興、五五三頁）。

(100) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月十四日『鎮圧』四、一頁。
(101) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(102) 賽尚阿奏、咸豊二年九月初十日『鎮圧』三、六〇九頁。
(103) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月十四日・九月二十二日『鎮圧』四、一・一四頁。
(104) 羅繞典等奏、咸豊二年十月初六日『鎮圧』四、三〇頁。張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、新賊（『太平天国』三、二九四頁）。
(105) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一四頁。
(106) 佚名『粤匪犯湖南紀略』『太平天国史料叢編簡輯』一、六五頁。
(107) F・O・九三一 一九〇六、咸豊二年十月、国立公文書館蔵。なお羅繞典等奏、咸豊二年十月初六日『宮中檔咸豊朝奏摺』六、七八頁には「所有官兵防剿及賊匪紮營處所理合繪圖、恭呈御覧」とあり、この図が一一月中旬の戦況を描いたものであることがわかる。
(108) 曾国藩奏、咸豊三年六月十二日『曾国藩全集』奏稿一、岳麓書社、一九八七年、六〇頁。
(109) 羅繞典等奏、咸豊二年十月初六日『鎮圧』四、三〇頁。
(110) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(111) 羅繞典等奏、咸豊二年十月初六日『鎮圧』四、三〇頁。光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(112) 羅繞典等奏、咸豊二年十月二十三日『鎮圧』四、五〇頁。
(113) 張徳堅『賊情彙纂』巻一一、賊数、老賊（『太平天国』三、二九一頁）。
(114) 羅爾綱『李秀成自述原稿注』増補版、中国社会科学出版社、一九九五年、一二二頁。
(115) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月十四日『鎮圧』四、一頁。また【図1―2】には岳麓山のふもとに向栄が、その西に馬龍が駐屯している様子が示されている。
(116) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一四頁。
(117) 張亮基奏、咸豊二年九月初六日、軍機処檔〇八六三四六号。また『張大司馬奏稿』巻一。
(118) 曾国藩奏、咸豊三年六月十二日『曾国藩全集』奏稿一、六〇頁。
(119) 張亮基奏、咸豊二年九月初六日、軍機処檔〇八六三四六号。また『張大司馬奏稿』巻一。
(120) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(121) 同治『醴陵県志』巻六、武備、兵事。
(122) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一八頁。
(123) 『江忠烈公行状』。また佚名『粤匪犯湖南紀略』によると、太平軍の伏兵攻撃によって清軍は「截爲両段」と分断され、多くが河辺へ逃げて溺死した。また河南兵六～七〇〇名、将校四七名が戦死して「大損軍威」という（『太平天国史料叢編簡輯』一、六五頁）
(124) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一八頁。
(125) 『江忠烈公行状』。

(126) 徐広縉奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一八頁。
(127) 『江忠烈公行状』。
(128) 羅繞典等奏、咸豊二年十月二十三日『鎮圧』四、五〇頁。
(129) 光緒『善化県志』巻三三、祥異、兵難附。
(130) 王闓運『湘軍志』湖南防守篇第一（岳麓書社版四頁）。
(131) 徐広縉奏、咸豊二年十月二十六日『鎮圧』四、五四頁。
(132) 郭振墉『湘軍志平議』湖南防守篇第一、岳麓書社、一九八三年、一九七頁。
(133) 『江忠烈公行状』。なお郭振墉『湘軍志平議』湖南防守篇第一によると、張亮基は太平軍が洞庭湖へ進出すれば「不復可制矣」と危機感を持ったが、欽差大臣の徐広縉が駐屯する湘潭へ援軍を送らざるを得なかったという（岳麓書社版一九七頁）。
(134) 羅繞典等奏、咸豊二年十月二十三日『鎮圧』四、五二頁。徐広縉奏、咸豊二年十月二十六日、同書四、五四頁。
(135) 駱秉章自注『駱公年譜』。
(136) 諭内閣、咸豊二年十一月初三日『鎮圧』四、七一頁。
(137) 軍機大臣、咸豊二年十一月初三日『鎮圧』四、七一頁。
(138) 徐広縉奏、咸豊二年十月十七日『鎮圧』四、四六頁。
(139) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月二十二日『鎮圧』四、一四頁。
(140) 張亮基奏、咸豊二年十一月十九日『宮中檔咸豊朝奏摺』六、三〇二頁。また『張大司馬奏稿』巻一。
(141) 鄒焌杰奏、咸豊二年十一月十七日、軍機処檔案〇八七五七七号。なおこの時瀏陽県に派遣された工作員は唐理雲、李亨道の二名で、東郷団長で廩生の王応蘋に捕らえられたが、周国虞らは王応蘋を殺害して計画が発覚するのを防いだという。また張亮基等奏、咸豊二年十二月二十二日『張大司馬奏稿』巻一。
(142) 張亮基奏、咸豊二年八月二十六日、軍機処檔〇八六一八九号。また『張大司馬奏稿』巻一。
(143) 賽尚阿等奏、咸豊二年九月初一日・九月二十二日『鎮圧』三、五七九頁・同書四、一六頁。
(144) 許瑶光『談浙』巻一（『太平天国』六、五六九頁）。
(145) 雷以諴奏、咸豊二年十一月二十九日、軍機処檔〇八七八二二号。